

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Clinical features and treatment status of antiacetylcholine receptor antibody-positive
ocular myasthenia gravis

(抗アセチルコリン受容体抗体陽性眼筋型重症筋無力症の臨床的特徴と治療評価)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻 高次神経制御系

眼科学 (指導教授 五味 文)

氏 名 一色 佳彦

重症筋無力症 (MG) は、筋の易疲労性、眼瞼下垂、複視など多彩な症状を呈する自己免疫性全身疾患である。眼筋型重症筋無力症 (OMG) の診断基準はあいまいで、明確な診断基準をもとに臨床症状や予後を多数例で検討した眼科からの報告は少なく、本邦からは未だない。今回我々は、眼症状のため眼科を受診し、アセチルコリン受容体抗体 (AChRAb) 陽性OMGと確定診断した症例の、OMGから全身型MG (GMG) への移行を予測する因子を調査した。さらに、ステロイド依存OMG症例に対する我々の治療プロトコールならびにタクロリムス (TAC) 併用の有効性を、ステロイド量と投与期間を分析することで評価した。

AChRAb 陽性で、日内変動や易疲労性を呈し眼瞼下垂と眼球運動障害の両方、またはいずれか一方を満たす OMG 症例 52 例を対象とした。まず、OMG に留まった症例 (p-OMG) ならびに GMG に移行した症例 (TMG)、それぞれの臨床的特徴を比較した。次に、p-OMG 症例を、TAC の承認前に治療を開始した Before 群、承認以後に治療を開始した After 群にわけ、プレドニゾン (PSL) の投与量と投与期間を 2 群間で比較した。第 3 に、Myasthenia Gravis Foundation of America Postintervention Status (MGFA-PS) を使用し、p-OMG の治療評価をおこなった。

最終対象症例は、p-OMG 群 41 例、TMG 群 11 例であった。AChRAb 価 ($P = .0006$)、胸腺腫の有病率 ($P = .001$) は、p-OMG 群に比べ TMG 群で明らかに高かった。p-OMG 群では、治療前と比較して MG composite score ($P \leq .0001$) と AChRAb 価 ($P = .005$) が明らかに改善した。1 日 PSL 量 20 mg 以上 ($P = .009$) および 10 ~ 19 mg ($P = .002$) の投与期間は、After 群で有意に短かった。最終診察時、MGFA-PS の 1 日 PSL 5mg 以下で軽微症状以上を達成できたのは p-OMG 群の 78.0% であった。

TMG 症例に特徴的な因子は、AChRAb 価が高値であること、胸腺腫を有することであった。p-OMG 症例は、我々の治療プロトコールでコントロールすることができた。ステロイドでコントロールできない p-OMG 症例に対し、TAC を併用することが有効であった。